

セラーズが言う自己についての「報告」とはどのようなものか？

What kind of "report" about self argued by Sellars?

過能洋平

### Abstract

In this paper, I examine how privacy and first person authority of self-confidence held by subjects are established. I do it by focusing on the “reporting” use of a language found in “report” that Sellars described in “Empiricism and the Philosophy of Mind”. I think that the self-attribution of reported contents plays an important role because in the arguments presented by Sellars, “report” means the report on the mental states of self. When we “report” the sensory impression, we take the sensory impression as attributable to the self. At the same time, “reporting” the sensory impression expresses the self-knowledge about the sensory impression. Based on this observation, first, I review the Sellars’s argument on how “reporting” use of a language is established. Then, I analyze the characteristic of the self-attributions. Finally, I consider the process of how privacy and first person authority are established from the self-attribution.

#### (1) 研究テーマ

セラーズの類比説を分析し擁護する

Analyze and defend Sellars’s analogy theory

#### (2) 研究の背景・先行研究

・背景：自己知の持つ性質として一般に、不可謬性と自己告知性、直接性がある。また主体がそれに対して私秘性や一人称権威を持つと考えられるだろう<sup>i</sup>。とはいえ、自己知がこうした性質を持つということ、主体がそれらに対して私秘性や一人称権威を持つことは前提されており、これらのことがいかにして成立するかについてはあまり論じられていないように思える。筆者が疑問視しているのは自己知や、それに対して主体が持つとされるこうした性質は何に由来するのか、またどのようにして成立するのか、ということである。これらを検討するにあたり、アメリカ分析哲学者の Wilfrid Sellars が “Empiricism and Philosophy of Mind”（以下 EPM と略記する）のなかで論じた自己についての「報告」という言語使用を考察することが解明につなが

と思われる。

・先行研究

セラーズ研究の基礎文献の一つは *Knowledge, Mind, and the Given* である。著者である DeVries と Triplett は感覚印象に関する言説について次のように述べている。「印象言明について報告する役割が適用されると、私たちが内観を通じて知識を獲得しうると、私たちは自分たちの印象を報告しうると、私たちがそれらに対する特権的アクセスを持つと言われうると、そしてこれらの印象の出来事はそうした出来事を持つ個人にとって私秘的であると、人が伝統と調和して述べることのできる意味がある」<sup>ii</sup>と述べている。ただ、印象言明が報告という役割を獲得するとどうしてそうなるのか、明確には述べていない。印象言明に報告するという役割が適用されることでなぜ私たちが内的出来事に対する一人称権威を持つと、述べることができるのだろうか？

また同じく基礎文献である *Wilfrid Sellars* において deVries はこの報告を非推論的なものと特徴付けている<sup>iii</sup>。この非推論的という特徴をブランダムは条件反射として特徴付けている。「すなわち、以前は推論されることだけが可能であったものを非推論的に報告する条件反射（多分、彼の思考に関係するある究極的には発見可能な神経生理学的出来事に依存しているもの）を訓練によって他の人のうちに発達させることができるのである」<sup>iv</sup>。

非推論的報告に関して、DeVries と Triplett<sup>v</sup>は次のような説明を与えている。未熟な野鳥観察者は最初、見つけた鳥をその大きさ、形、色といった手がかりをもとに図鑑などで調べることで、どんな鳥か確定する。見つけた鳥の特徴と図鑑に記載されている特徴とを比較することでその鳥の種類を確定する。その野鳥観察者は観察の経験を積むことで図鑑を調べずとも、次第にパッとみただけでその鳥を確定することができるようになる。

感覚印象を条件反射的に報告するようになるとしても、やはりこの「報告する」という役割を持つ言語使用の習得により、どうして感覚印象の私秘性やそれに対する一人称的権威が成立するのかあまり明瞭ではないように思える。

・セラーズの議論の概略：ここではセラーズがいう「報告」という言語使用が成立するまでの議論を整理する。

セラーズは EPM の第 12～16 部において、自身が「神話」<sup>vi</sup>、と呼ぶ物語（いわゆる「天才ジョーンズの神話」）を通じて、内的出来事に関する積極的な主張を展開している。その神話の中にライル人たちと呼ばれる人々が登場する。彼らは、心や内的、思考といった概念を持っていない。そのため彼ら

は物理的対象やその性質について指示する事はできるが、内的出来事や直接経験について語る事はまだできない。セラーズはそれらについて語る事ができるようになるために、彼らの言語使用や概念を追加拡張していくことを通じて、自身の見解を示している。

ライル人たちは常に声に出して考えながら知的な振る舞いをしていた。ある時彼らが声に出して考えずとも知的な振る舞いをすることにジョーンズは気がつく。そこで彼は、普段声に出して考えているときに発話するのと同等の「内言」が行為者のうちに生起し、それから始まる内的過程の到達点として観察可能な言語行動が生じる、という理論を考えた。これを使って、ある主体 A の振る舞いを見ている別の主体 B は「A が「p」と考えている」という文を用いて彼の振る舞いを記述する。この「p」が理論的に措定される「内言」にあたるものである。次に B が同様の振る舞いをするとき同じく「私は「p」と考えている」という文を用いて自身の心的状態を報告する。同時に B はこの文を自己帰属することで自分の心的状態を理解していることになる。そして B によるこうした文の使用を行動による証拠が強く支持するときに、B は他者たちから肯定され支持しないときには否定されることを通じて「合理的に信頼できる自己の記述」をするようになる。この心的状態に関する自己記述が「報告」という役割を果たしているのである。

次にジョーンズは感覚印象の理論を考える。ライル人たちがそれまで持っていたのは思考の枠組みに属する知覚の概念である。これは端的に言えば、「赤い三角であるものを見ている」や「テーブルが茶色であることを見たり、ピアノが調子外れであることを聞いたりする」<sup>vii</sup>という言語使用で表されている、「であるのを見る」の言語使用である。これは観察可能な物理的対象についての言説である。しかしライル人たちは「印象や、感覚や、感じなどのようなもの、約言すれば、哲学者が「直接経験」の見出しでまとめてしまうような事象へ」<sup>viii</sup>言及できない。つまり、ライル人たちは物理的対象について語ることはできても、その自分への現れといったものについて語る事ができない。というのも彼らはまだ現れという概念を持っていないからである。

このような状態のライル人たちに見間違いや錯覚、幻覚が生じたと考えてみよう。ジョーンズはそれらについて語れるようになるために感覚印象の理論を提案する。彼は感覚印象を内的理論的出来事--知覚主体の状態として想定されたもの--として導入する。<sup>ix</sup>ジョーンズは感覚印象について内的レプリカの領域という考えをモデルとしている。このモデルはレプリカが知覚者の中に生起することであって、レプリカをさらに知覚することではない。主体

の内に生起すると措定されるレプリカのモデルとなるものは固有の性質を持つ物理的存在である。赤い三角という性質はそのように記述される物理的存在者だけが持つ。赤い三角形の印象自体が赤い三角だとは限らない。こうしたモデルと措定されるレプリカの関係は「赤い三角の印象は赤い三角形をしたウェハースに、その度合いをきちんとした形で特定することはできないが、類比的であるということである」<sup>x</sup>。この類比の本質的特徴は「視覚印象は、可視的対象の色や形が互いに類似したり異なったりする仕方と構造的な類似を有する体系の中で、互いに類似したり異なったりする関係に立っている」<sup>xi</sup>ことである。

そしてジョーンズは仲間たちにこのレプリカについて語ることを訓練する。彼は、「同胞が赤い三角形の印象を実際にもっているとき、そしてそのときに限り、「私は赤い三角形の印象をもっている」と言うように訓練するのである」<sup>xii</sup>。例えばある主体 A が「赤い三角形であるものを見ている」と述べるなら、それは A にとっての対象の現れの報告ではなく、物理的対象についての客観的な記述である。一方で A が「赤い三角形の印象をもっている」と述べる場合、これは対象について記述しているのではなく、その対象の A にとっての現れについて報告している。A のこの発話を聞いている別の主体 B は A の内的状態に「赤い三角形の印象が生起している」と措定し、A に帰属させる。次第に A はこの発話をするとともに自身のうちに「赤い三角の印象」が生起していると措定し、自己帰属するようになる。

### (3) 筆者の主張

私の考えでは、「報告」という言語使用には自己帰属が深く関与している。

帰属というのは通常、 $x$  は  $y$  に帰属する、 $x$  は  $y$  に帰属される、という使用を持つ。性質や属性、機能がある物理的対象に帰属される。赤さがこの対象に帰属されると述べる場合、この対象が赤さを有していると述べることに等しい。帰属には 3 つの要素がある。①性質や機能を持つ存在、②性質や機能自体、③①と②の関係を理解するもの。通常の帰属は①、②が一致しており③がそれらとは独立にある。ある対象 (①) に赤い三角という性質 (②) をある人が帰属する (③) という形になっている。自己帰属はこれら 3 つが同一である場合である。

発話から内言や感覚印象を帰属する前段階として、より単純素朴に物理的対象に性質や属性を帰属する段階がある。ある対象に大きさ、硬さや色といった性質を帰属させる。対象  $O$  に性質  $x$  を帰属させることは、 $O$  が  $x$  を持つ

と S が理解することである。自己帰属はある性質や機能の帰属先を自分にすることで可能となると思われる。

「報告」がジョーンズの神話の中で使われるのは自分の「内言」の発話訓練の時である。ある主体 A の「p」という発話が振る舞いによる証拠と合致している際、別の主体（A の発話の聞き手）B が肯定することとともに A は p という内言が自分に生じていたと措定し自己帰属する。また振る舞いによる証拠と「p」という発話が合致していない場合、戸惑いと訂正が発話者に返される。自己記述することは記述内容を自分に帰属することと言える。

主体 A が発話せずに振舞っている時主体 B はその振る舞いのみから A の内言を類推するしかない。実際にどのような内言（＝思考）があるのか類推ではなく報告できるのは A のみである。そしてこのような状況になった時、A の「報告」には独特な権威が生じる。他の事柄、例えば物理的対象についてであれば、標準的状况における標準的観察者なら、誰でもその対象について記述し、どんなものであるか他者に等しく報告できる。しかし内言の場合、それを報告できるのはその内言を持つ当の主体のみである。

では感覚印象の「報告」の場合はどうか？内言の場合と同じ構造で考える。セラーズによると内言を報告する訓練は「赤い三角形の印象を実際に持っているとき、そしてそのときに限り、「私は赤い三角形の印象を持っている」と言うように訓練するのである」。主体が「赤い三角形の印象を」持つのは実際に赤い三角である対象を見ている時である。その時に「赤い三角の印象を持つ」と述べることを肯定する。そうでない時に、この発話を否定することで自己記述するように訓練する。

ここまでは内言の場合と同じだが、実際にあるものと生起している感覚印象が異なる場合はどうだろうか？青い球体であるものを見ているときに「私は今赤い三角の印象を持つ」と述べるならば戸惑いが返されるが、強い訂正はなされないだろう。発話者は自分の感覚印象に関する発話に対する応答から、自分の感覚印象が少なくとも他の人の感覚印象とはズレているということを理解して、レプリカが正常に成立するように試みたり、あるいは「報告」を変更したりするだろう。

現在自分にどのような感覚印象が成立しているかを「報告」できるのはその人だけである。物理的対象に関する報告は誰でもできるが、内に生起している感覚印象に関して報告できるのはその感覚印象が生じている当の主体のみである。一方で、他者はある人に感覚印象が生じていると措定できるだけである。この言語使用の違いにより、感覚印象の「報告」に独特な権威が成立すると思われる。

ある感覚印象を「報告」することはその感覚印象を自己帰属しているとともに、それに関する自己知を表明していると言えるだろう。人は自分に生じていると非推論的に知っている感覚印象について語るができる。自分に生じている感覚印象を記述することはそれを自分に帰属させていることである。こうした言語使用は感覚印象の一人称的言説である。

物理的対象について記述する言語使用は「であるのを見る（感覚する）」の語りを当てはめ、感覚印象について記述する言語使用には「のように見える」の語りを当てはめる。感覚印象の一人称的権威はこうした現れについての語りをし始めた時に成立する。またそうした語りを習得することとともに自己知が成立する。物理的対象についての語りは対象についてあるいはそれに関する知識を述べているにとどまる。他方で感覚印象について語ることは、発話者が持つ特定のパースペクティブからの現れについて語っている。感覚印象の「報告」は感覚印象についての自己知の表現であるとともに、主体の現在の内的状態についての報告である。

#### (4) 今後の展望

主体が自己知に対してもつ一人称的権威について、「報告」という言語使用の特徴に注目して検討した。今後さらにこの方向での考察を進める。そして自己知自体についてセラーズがどのような立場に立っているかの検討へと進もうと考えている。セラーズ自身が直接的に自己知について論じたことはほとんどなく、また二次文献においても論じられることは同じく少ない。ひとまず、彼が認識論において合理主義に立っているように、自己知においても合理主義に立つと筆者は仮定している。もしそれでうまく解釈が通らない場合、認識論に関するセラーズの主張との齟齬が生じると思われる。その場合、セラーズ解釈、また彼がとるべき立場との整合性を考えていく必要がある。これ自体セラーズ解釈に貢献すると思われる。考察を進めた結果、新たなセラーズ解釈を導き出せるかもしれない。またセラーズが自己知についてかなり独特な立場をとっていると判明したなら、自己知の議論への貢献につながるかもしれない。自己知からセラーズの議論を再構成するのは、これまでのセラーズ研究であまり検討されていない観点である。

---

<sup>i</sup> 金杉武司 (2014) pp.167-8

- 
- ii deVries, Willem A. and Triplett, Timm.,(2000), pp.176-77  
iii deVries, Willem A., (2005), p.210  
iv Brandom, Robert. (1997), p.176  
v deVries, Willem A. and Triplett, Timm.,(2000),p.153  
vi Sellars, (1997) p.91  
vii Sellars, (1997) p.108  
viii Sellars, (1997) p.108  
ix このレプリカの生起は知覚者の状態とされるが、生理的状态として導入されるのではない。しかしセラーズはこれが生理的状态と判明する余地を認めている。  
x Sellars, (1997) p.112  
xi Sellars, (1997) p.112  
xii Sellars, (1997) p.115

(5) 参考文献

- ・ Brandom, Robert. (1997), Study Guide, in Wilfrid Sellars: *Empiricism and the Philosophy of Mind* , Harvard .
- ・ Sellars, Wilfrid., (1997), *Empiricism and Philosophy of Mind With an Introduction by Richard Rorty and a Study Guide by Robert Brandom*, Harvard University Press. (浜野研三訳), (2006), 『経験論と心の哲学 ウィルフリド・セラーズ』、岩波書店
- ・ deVries, Willem A. and Triplett, Timm.,(2000), *Knowledge, Mind, and the Given: Reading Wilfrid Sellars's Empiricism and the philosophy of mind, including the complete text of Sellars's essay*, Hackett Publishing Company.
- ・ deVries, Willem A., (2005), *Wilfrid Sellars*, McGill-Queen's University Press.
- ・ 三谷直澄 (2010) 「マクダウェルはセラーズをどう理解したのか? : 「見えるの語り」の選言主義的解釈をめぐる一考察」、信州大学人文科学論集 44号、pp.1-20
- ・ 三谷直澄 (2011) 「セラーズにおける意図の分析について」、信州大学人文科学論集 45号 pp.1-21
- ・ 村井忠康 (2012) 「知覚と概念-セラーズ・マクダウェル・「描写」-」、科学哲学 45-2号、pp.99-114
- ・ 金杉武司 (2014) 「自己知と自己認知」、信原幸弘・太田紘史編『シリーズ新・心の哲学 I 認知篇』、勁草書房、pp.167-206.

(所属：千葉大学大学院人文公共学府人文公共学専攻)